

傳士義七十四

ございませんかございますから私が承まはつて……大「イヤ別に何  
もすすことはさい万事其方に任せるから……源「元助ヤそまではさ  
いが當家にある諸道具萬端残らず其方遣はすから引拂ひの節は賣  
拂つてでも參るが宜い 元「有難う存じます」と禮義を致そ其中支  
度も整ひ三人は打連立つて出て參ります跡も残つた元助はア、立  
派のものなど三人の後影を見て貰ひましたる衣類刀夫を正面に直し  
て生きて居る人に口を聞くやうに 元「旦那様今晚一晩が旦那様の  
身体明晩は大方働さでございませうと云つて居りませたが何か思  
ひ付いたと見へて隣りへ頼んで浪宅を出で近所の兩國に市場がござ  
いまして青物問屋水菓子を買る所が澤山ございます是へ參つて蜜柑  
を五箇買ひまして歸つて来て其蜜柑を其夜から刻き始めませたスツ  
カリ筋を取つて仕舞ひ口へ直ぐ入るやうに拵へて之を籠み詰め十  
四日を待つて居ります然る所十四日の雪の中でございませ夜中に至

傳士義七十四

ると聞へまする山鹿流の陣太鼓遠く離れん龜澤町のことでありませ  
から手に取るやうに之が聞へます其晚一晩は元助寐るどころでは  
ございません燈火を點け神酒を供へ主人から貰ひました脇差を正面  
据へどうぞ本懐達成ありませすやう旦那様の傍身は怪我が  
ございませんやうは一同の傍身にも傍傷の付かぬやうに尙は敵  
上野介の首を早く旦那様の傍手に取りませすやうに大きな聲でこそ  
申ませせんが頼り又祈つて居ります中夜が明るとまだ薄開い  
元助は回向院の脇まで出張つて居ります所へ吉良上野介の傍首を  
携へ隊伍亂さず引上げて參ります一同の者回向院の横手から飛出  
したる忠僕元助 元「エ、旦那様……旦那様といふ聲を聞いて暫く足を  
留め何者であるかど見る中に大高源吾一番先きに見付けませた 大  
片岡氏」元助が出て居る 源「イヤ元助か 元「へえ先刻から此處よ  
傍待して居りませた昨晚は働さでございませした 源「どうして是

傳士義七十四

へ出て居つた 元「へエ……もう敵討をさるには相違ない 本懐  
成就は相違ないと存じましては引上げの皆様が喉が乾いても雪を  
召上ると腹臑梅を悪く致すと存じ一層雪よりはと存じまえて時の物  
でありますから蜜柑を此通り削いて持つて参りまえたサア皆様上  
り下さいまし 源「ア、左様か夫はさうも辱けあい大石氏」 大石  
何である 源「イヤ昨日物語りを致した是は元助とやす拙者の家來  
大高武林が證人とあつて呉れたゆゑ一大事を明かしたといふ話を  
また元助といふ男でござる 大石「ア、さうであるか見れば聊か見覺  
もある……其方が何か元助といふ忠義者か 元「恐入りまそる忠義者  
あつて仰せがございましては痛み入りまそ此度は城代様の御働き  
では一同の血氣が揃つて首尾能く本懐を遂げられたでござい  
ませうナ 大石「ア、喜んで呉れ去年三月十四日は無念の死を遂げ  
遊ばえた殿様の思召を續いで吉良少將の首を頂戴し是より高輪

○百九十四

傳士義七十四

高松山泉岳寺へ引上げる所 元「左様でございますか 大石「今承まは  
れば一同の者も蜜柑を恵み呉れたとのこと能く心付いて呉れた 元  
へエ此通り直ぐに口へ入れるやうなまて持つて参りました此中  
ございますから一々削て居りましたは大變と存じまえて一昨日の晩  
から昨日は一日蜜柑を削て居りました 大石「其志ざし辱けなく存する  
元「イヤ是は武林様で…… 唯「さうした元助……武林唯七は和久半太  
夫といふ者に出逢ひ半太夫のために肩間へ切付けられた小鬘先から  
額へ掛けて彼是れ五寸餘の傷鬘帯を致して居りまをければも上へ血  
が染んで居りま中怪我をして居るのは一番此武林唯七が大さう  
ございます之を見た元助が 元「貴所は其んか又傷を受ける位でござ  
いますから定めし立派な御働きを致ましたらうナ 唯「別は立派な  
働きも致さんけれども和久半太夫といふものを仕留めて…… 元「へ  
エ和久半太夫といふのは劍術の師匠か何かで 唯「さうさ 元「へ貴

○百九十五

所が其人にやられましたか 唯、やられたといふは情ないナ 元、私のやうなものあれば宜うございませう少し 唯、イヤに云ふナ 元、痛うございませうか 唯、痛いと云ふことは辛い武士たる者が…… 元、幾ら武士でも其んきに傷をば受けおそつては痛いと云ふは違ひありますまい私さども昨夕熱が出て…… 唯、此野郎又始末だ」彼是うする中、夫に差出た蜜柑を手取り奪取り 源、コレ元助我々共唯、今より高輪泉岳寺へ引上げるがもう此上こそ面會は致さん 元、誠に恐入りませうございませう左様あれば旦那様は別れやませうが何かは國表へ送つて下さるものはございませうか 源、能くやして呉れた是は拙者の認めたる品之をどうか在所へ送つて呉れ源吾右衛門高房といふ名の付いてました鎗短冊自分の書いたる片岡源吾右衛門高房といふ名の付いてたるを何よりの土産元助は之を受取る其中に一同意氣揚々として回向院前の方へ参りました是は泉岳寺へ引上げましたが既、引上げの

は話は演じてありますから別に此處へは上げませせん 扱元助は其日の中、龜澤町の浪宅を引拂ひ道具諸式も残らず二束三文に賣つて仕まつて其金を纏めて播州赤穂へ参りました道中別段の話もございません 然る所が赤穂西野町といふ所の懸意向きの家、片岡の妻子は今引取られ片岡の便りを待つて居ります所へ元助が立歸り委細の話をすると、ハ、赤穂にも仇討ちの評判は立つて居ります片岡の妻子も薄々承知致させました所へ元助が立歸つて委細の話を致しましたので一時は涙も沈みました位けれども忠義の名前を天下へ上げましたことゆゑ源吾右衛門妻子は後に喜んだといふことでもございませう時に元助といふ者は親兄弟にも別れて獨身でございませうの幸ひ坊主もあつて播州赤穂を立退き旦那様の爲四十餘人の人の菩提を吊うといふ所から國々廻國を致し廻り廻つて参りましたのは上総の加能山の觀世音へ参詣をし其時に聊か加減が悪ういふ所から加能山の麓

傳士義七十四

白石村といふ所へ参りまえて此近邊の旅宿に泊り居りまする中に危  
態のもので二三人々が尋ねて来るやうにあり幸ひ庵室が明いて居る  
から其庵室へ這入つたら宜からうといふことで加減の悪かつたのが  
幸ひにあつて草の庵に這入つて居る中に多くの人の他力を受け豫々  
自分の志して居たことでありますから加能山の麓白石村の庵室の脇  
へ四十有餘人の石碑を立てました今以つて上総加能山の麓にござい  
ます一寸考へて見ると此碑が赤穂か廣島あたりでありますから其縁  
故がございしまするが上総の加能山の麓に義士の墓があるといふは誠  
に妙き譯でございしまするが其實は元助が之を立てましたもので到頭元  
助八十九才まえて此所に往生を遂げました依つて其最寄の寺に其死  
骸を葬りました人が人呼んで之を忠義の塚と云ひます其人は死んでも  
名前は朽ちず又其石碑も未だ朽ちず加能山の麓ある白石村は残つて  
居ります之れ元助忠義の塚の話でございします

○百九十八

傳士義七十四

赤穂 義士 四十七士傳 卷五畢

○百九十九

明治二十九年九月廿五日印刷  
明治二十九年十月一日發行

(四十七士傳卷五)

東京市淺草公園六區三號百四

桃川燕林事

講演者

蘆野萬吉

東京市日本橋區藥研堀町四番地

速記者

今村次郎

東京市神田區佐久間町三丁目卅八番地

發行者

市川路周

東京市神田區柳原河岸第十四號地

印刷者

龍雲堂大場沃美

東京市神田區佐久間町三丁目卅八番地

發行所

文事堂

版權所有

